

3 市場経済の問題と思想路線の問題

——鄧小平の関連論述をめぐる対談録

龔育之

客人 今年〔1992年〕4月、あなたが上海の新聞に発表した二つの論文は、たいへん注目され、とくにその中で社会主義的市場経済に論及したものは、小平同志の、だれも引用したことのない関連論述を紹介し、みなさんの重視や関心を引きましたね。

主人 そうです。『解放日報』に発表した「中国の特色をもつ社会主義の旗の下で —— 鄧小平の著作の読書ノート」は、人民出版社から単行本として出版されました。『文匯報』に発表した「思想を解放し、生産力を解放しよう —— 鄧小平同志の重要な談話の学習」は、『新華文摘』の6月号に収録されています。この機会を利用して、二つの論文を初めて発表したときのいくつかの誤字や誤植・脱落を、訂正したいと思います。

客人 論争もあったそうですね。

主人 論争があることはよいことです。百家争鳴、自由な討論、実践による検証！「大きな帽子⁽¹⁾」でもって脅したりしなければ、よいことです。

客人 どんな論争があったのですか。

主人 おおよそ、主には市場経済の問題です。

小平同志の6回の関連論述

客人 小平同志の市場経済と社会主義との関係の論述、いくつかの意見は、とても重要で、きわめて啓発的です。

主人 わたしの感想ですが、小平同志の論述の最も重要で、最も啓発的な点は、論述の細部にではなく、市場経済についての認識問題と思想路線を正す問題とをしっかりと結びつけた点にあります。彼は、関連論述の中で、正しい路線をつ

らぬき、思想の解放、实事求是のマルクス主義の思想路線を堅持すべきだと強調しています。このような思想路線を守って、はじめて市場経済についての認識問題を正しく解決する道が探しだせるのです。

客人 小平同志の関連論述は多いでしょうね。

主人 わたしのあの読書ノートでは5編を紹介しています。最近新聞に発表された薄一波同志の「『半月談』思想政治活動の革新賞」の表彰式での講話では、まだ発表されていないものが紹介されています。全部で次の6編です。①1979年11月26日の『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の副編集長F・B・ジブニー氏等との談話の中に一つ。②1984年10月22日の中央顧問委員会第三回総会における講話の中に一つ。③1985年10月23日のアメリカの企業家代表団との談話の中に一つ。④1989年6月9日の首都戒厳部隊の軍以上の幹部との接見のさいの講話の中に一つ。⑤1990年12月のある談話の中のひとつで、薄一波同志が最近紹介したもの。⑥1992年1月から2月の南巡談話の中に一つ。

客人 この6編以外に、この問題に言及した談話がまだあると聞いていますが。

主人 わたしも聞いたことがあります。文献に記載されているもので、見つけてカードにとったものは、この6編です。

客人 小平同志のこの6編の関連論述の背景や内容を詳しく紹介していただけますか。

第一次論述の背景と内容

主人 まず最初に、1979年11月26日のジブニー氏との対談についてお話しましょう。このときは、[党の]第11期3中全会が開かれてからまだ1年たっておらず、「歴史決議」の起草のちょうど準備中のことでした。対談は、社会主義についての認識や、資本主義と社会主義の関係にまで広範に及びました。談話の中で小平同志は次のように言いました。「もちろん、資本主義はいらぬが、発達した、生産力の発展した、国を富強にする社会主義はある。経営管理方法を

含めて、資本主義のよい点を学ぶことは、決して資本主義を実現することと同じではない。つまり社会主義は、それらの方法を利用して、社会的生産力を発展させるのである」。

客人 資本主義制度の下で発展したよい方法を利用して社会主義を発展させること、これは重要な指導方針です。

主人 このような指導方針を確立するためには、まず最初に思想路線の問題を解決する必要があります。思想の解放、实事求是、[すなわち]生産力を発展させるという社会主義社会の実際の必要から出発して、すべての利用できるよい方法を試し、実践の中で取捨を決定し、発展させるのであり、最初から観念的に資本主義制度の下でのすべての方法を拒絶しないこと、こうしてはじめて、このような指導方針を受け入れ、確立することができるのです。

客人 小平同志は、このような指導方針を述べてから、市場経済の問題を話されたのでしょうか。

主人 はい、そうです。談話の中で小平同志は、市場経済というとき、資本主義の社会、資本主義の市場経済に、限られるなどということは、まったく正しくない、と指摘しています。社会主義が、どうして市場経済を行っていけないのでしょうか。それは、資本主義だとは言えません。わたしたちは、計画経済を主とし、市場経済とも結びつくのです。彼が言うには、市場経済は、封建社会の時期にすでに芽生えていました。社会主義も市場経済を行うことができるのです。彼はまた次のように言いました。社会主義の市場経済は、方法的にも、基本的にも、資本主義社会のそれに似ているが、違いもあります。それは、全人民的所有制の間関係であり、当然、集団的所有制の間関係であり、外国資本主義との関係でもあります。しかし、結局は社会主義のものであり、社会主義国のものであります。

客人 小平同志がまったく正しくないと考えた観点は、どういった人たちの観点でしょうか。

主人 わたしの考えでは、二種類の人々がこの観点をもっています。一種類は、ブルジョア的な多くの論者であり、彼らは資本主義を賛美し、市場経済を賛美

しますが、社会主義に反対し、市場経済といった立派なものは、資本主義だけが行うことができるのであり、社会主義は計画経済を行い、市場経済を行うことはできない、と考えます。彼らは、社会主義を不変のものと捉らえています。もう一種類は、社会主義のある種の論者です。彼らは、前の類型の人と立場はあい反するが、論拠は似通っており、次のように考えます。市場経済は資本主義だけが行うことができるのであり、社会主義は行うことができない。社会主義だけが計画経済を行うことができるのであり、計画経済は、社会主義の本質および優越性である、と。彼らもまた、社会主義を不変のものと捉らえているのです。

客人 この二つは教条主義です。反社会主義の教条主義と社会主義の教条主義です。

主人 そう呼んでも、かまいません。もちろん、かならずしもそう呼ばなくてもよいでしょう。つまり、小平同志は、「社会主義だけが計画経済を行うことができる」という硬直した観念に突破口を開き、社会主義と市場経済の両者はあい入れないことはないと考え、したがって、わが国の社会主義の改革および発展のために、新しい思考の道、すなわち「社会主義もまた市場経済を行うことができる」という新しい思考の道、を開拓したのです。

客人 わが党の文献で、これがはじめて社会主義的市場経済を提起したものでしょうか。

主人 社会主義的市場経済という概念を提起し、あわせて初歩的な限定および説明を与えたという点で、おそらくはじめてでしょう。社会主義は市場経済を完全に排除するという観念を打破した点で、わが党の一部の指導者は、これ以前にすでにこの問題を探究し始めていたのです。

客人 いつでしょうか。

主人 昔のことは別として、第11期3中全会の少し前、1978年の7月から9月、国務院で何度も研究討論会が開かれ、経済問題について広範に討論されました。この研究討論会では、すでに「計画経済と市場経済の結合」という思想が提出されています。

客人 小平同志が、社会主義もまた市場経済を行うことができると述べたことは、一年前のこの討論と関係があるのでしょうか。

主人 おそらくあると思います。第11期3中全会後まもなく、1979年の春、わが党の指導者層の中には、計画経済に現れた欠点を一歩進んで探究し、主な欠点は、「比例にもとづく計画がある」という一文があるだけで、社会主義制度の下でもかならず市場調整があるという一文がないことだ、と考える者がいました。この欠点をもたらした思想上の原因は、社会主義経済制度の建設の経験と、自国の生産力発展の実際の状況とにもとづいて、マルクスの原理（比例にもとづく計画）を発展させなかったことです。この探究から得られた結論は、次の通りです。社会主義の時期には、かならず二つの経済がある。計画経済の部分、これは主要であり、市場調整の部分、これは従属的であるが、必要なものでもある。ある指導者は、「計画調整と市場調整の結合」という表現を用いたこともある、と言いました。

客人 1979年11月、小平同志が、社会主義もまた市場経済を行うことができると述べたことと、この探究とは関係があるのでしょうか。

主人 おそらくあるでしょう。当時、理論界には一歩前進した探究がありました。呉敬璉同志は、最近（8月14日）『文匯報』に談話を発表し、次のように述べています。理論界のある同志はすでに、「計画調整と市場調整とが結合した商品経済」、「生産手段の公有制が優勢を占め、多くのウクライドが併存する商品経済」、「社会主義経済は計画的商品経済」等々の新しい思想および表現を提出していた、と。しかし、理論界には異なる意見もあります。ある論文は依然として、「社会主義経済はただ計画経済だけである」と考え、次のような批判をしました。もしわたしたちの経済を商品経済と概括するならば、社会主義経済と資本主義経済の本質的差異を曖昧にする。もし商品経済の原則に照らして、国营企業を完全独立採算、損益自己責任の経済単位に改変し、競争が経済発展の原動力であることを確認するならば、実際には「社会主義的計画経済の原則」によってではなく、「資本主義的市場経済の原則」によって、わが国の经济管理制度の改革を行うことになる、と。

客人 論争の結果はいかがでしたか。

歴史決議と第12回党大会報告の定式

主人 1981年6月の第11期6中全会は、中国共産党中央の「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」を採択し、決議の中で党中央のこの問題に対する規範的性格の定式をつくりました。「公有制を基礎に計画経済を実行し、同時に市場調整の補助的作用を発揮させなければならない。社会主義的な商品生産と商品交換を全力をあげて発展させなければならない」。この定式は、計画経済だけを認め、市場調整を排除する伝統的観念と比べて、党の理論と政策・思想の一大前進です。

客人 しかし、ここではまだ商品経済、市場経済という定式が使われておりませんね。

主人 1982年9月の党の第12回大会が採択した報告の中の定式は次の通りです。「計画経済を主とし、市場経済を従とする」。これは、「歴史決議」の中の定式と一致しています。しかし、第12回大会報告は、計画は指令性計画と指導性計画という二つの部分に分けなければならないという新しい思考方向を確認し、したがって、通常、計画経済を指令性計画だと理解する伝統的観念を訂正したのです。報告はさらに次の点を強調しました。むろん指令性計画を実行しても、指導性計画を実行しても、客観的实际に合うように努め、常に市場の需給状況の変化を研究し、価値法則を意識的に利用しなければならない……。これらはすべてまだ「歴史決議」の中にはなく、党の理論と政策・思想は、「歴史決議」と比べて、また一步前進しました。しかし、第12回大会の報告ではまだ商品経済、市場経済の定式は用いられていません。

客人 党中央は規範的性格の定式をつくりましたが、それ以前の党中央の指導者の規範的定式と異なる定式は、すべて正しくないもの、あるいは正確でないものなので、以後二度と用いてはならず、以後はすでに確定した規範的性格の定式を用い、規範に合わない過去の定式を改変しなければならない、というこ

とを意味するのでしょうか。

主人 あなたの提出した問題は、検討に値します。通常、党の指導幹部や党の理論活動家は、中央がすでにある規範的性格の定式を確定した後に、総じてその規範的性格の定式を採用します。細かく考えると、党の決議が形づくる規範的性格の定式と、過去のある別の定式との間の差異には、次の三つの様態があります。第一の様態、過去のいくつかの定式は、反復討論や実践による検証によって、正しくない、あるいは不正確であることが証明され、当然、二度と用いてはいけません。第二の様態、過去のいくつかの定式は、規範的性格の定式と定式の上でいささか違いがあるが、実質的には大きな違いはないか、あるいは互いに排斥していないので、どうしてもどこでも規範的性格の定式を用いる必要や、違うところがある他の定式の使用を許さない必要はありません。第三の様態、ある定式は間違っていないばかりか、はなはだ革新的、先導的であるが、まだ政策決定圏の共通認識を勝ち得ておらず、したがって、規範的性格の定式として採用されておらず、将来、共通認識を勝ちとれば、規範的性格の定式として採用される可能性があります。

客人 社会主義的市場経済という定式は、どの様態に属するのでしょうか。

主人 少なくとも、第一の様態には属さないと思います。小平同志も第一類には属さないと考えていたようです。

客人 どうして分かるのですか。

主人 小平同志がその後も、「社会主義も市場経済を行うことができる」という定式の使用を放棄しなかったからです。今から、小平同志の関連論述の第二のものを少々紹介しましょう。

客人 ちょっと待って下さい。先ほど紹介したばかりの第一の論述、つまり小平同志と『エンサイクロペディア・ブリタニカ』副編集長ジブニー氏等との対談は、どこから引用したのですか。

主人 1981年9月、地方の社会科学院の刊行物が、「鄧小平副主席の四つの基本原則の堅持および政治・思想活動の強化の問題に関する講話摘要」と題する一組の集録文献を掲載し、その中に、小平同志とジブニー氏等との対談が摘録

されています。わたしの二つの論文は、小平同志のその談話を紹介し、そこから引用したのです。

客人 出所は信頼できますか。

主人 つき合わせをしたので、信頼できます。

第二次論述と経済制度改革の決定

主人 わたしが見た文献から言って、小平同志が二回目にこの問題を話したのは、1984年10月の顧問委員会第三回総会における講話でした。

客人 この5年間に、「計画経済と市場経済の結合」あるいは「計画調整と市場調整の結合」をほかに話したことはなかったのですか。

主人 たぶん、あったでしょう。わたしが収集した第二次論述は、この問題にふれた講話であり、公刊された鄧小平『中国の特色をもつ社会主義の建設』という本の中にすでに入っています。講話の背景は、第12期3中全会が党中央の「経済制度改革に関する決定」を採択したことです。中国の経済改革は、70年代末に農村から始まりました。農村改革は、家族の生産量連動請負責任制の推進を中心とし、専業戸⁽²⁾の大幅な発展と農産物の統一購入・統一販売の部分的開放に加えて、いく年にもわたる努力、成果は、顕著であり、農業生産と農民生活は急速に向上し、商品経済は日まじに活発になりました。都市経済にも活気が生まれました。情勢は、農村で始まった改革から、都市を中心とする全面的な経済制度改革まで前進することを要求し、経済制度改革の全局面を統轄する戦略的政策決定と理論的指導の形成を要求しました。第12期3中全会の決定は、このような要求に応じて生まれました。それは、社会主義経済理論および経済制度改革の指導思想におけるわが党のさらに大きな一歩前進の標識でした。それは、商品経済と資本主義とを同一視し、社会主義と商品経済〔著者は計画経済と誤記〕とを対立視してきた伝統的観念を突破し、「社会主義的計画経済は、価値法則に意識的に依拠し、それを運用しなければならない、公有制を基礎とする計画的商品経済である」という新しい観念を確認し、「社会主義的商品経済を

発展させる」という新しい方針を提起しました。それはまた、「計画経済は、指令性計画を主とすることと同じではない」を提起し、「指令性計画の範囲を徐々に適切に縮小し、指導性計画の範囲を徐々に適切に拡大し」なければならないことを確認したが、二年前にこの観点は公然たる批判を受けたのです。顧問委員会の第三回総会は、第12期3中全会の閉幕に引きつづいて招集・開会されました。小平同志は、この会議の席上の講話で、経済制度改革の決定は「立派な文書」であり、「綱領的文書」であると称賛しました。彼は次のように述べました。「この文書のすばらしい点は、社会主義が何であるかを解釈したことであり、ある点はわたしたちの“ご先祖様”が言ったことがない話、ある点は新しい話である。明確に説明していると思う。過去、わたしたちはこのような文書を書くことができず、この数年の実践がなかったならば、この文書は書けなかった。書くことができても、採択は容易でなかった。わたしたちは、自身の実践によって、新しい状況の下で現れた新しい問題に答えをだした。四つの原則の堅持について言わなくてよいのか。それはまさに社会主義の堅持であり、さもなければ、“四人組”の“社会主義の雑草はいるが、資本主義の種苗はいらない”になってしまう。思想の解放、わたしたち古参の同志にはこの任務がある」。

客人 思想の解放、マルクス主義の認識論と思想路線についても話して下さい。

主人 それは、貫通する一筋の赤い糸のことですね。“ご先祖様”が言わなかったことを強調し、新しいことを強調するのは、マルクス主義の堅持、マルクス主義の発展を強調することでもあります。小平同志は別のところで次のように述べました。マルクス以後の100年、結局どんな変化が生まれたのか。変化する条件の下で、マルクス主義をどのように認識し、発展させたのか。はっきりさせる必要がある。マルクスの死後100年、200年、1000年たって生まれた問題の解決を、マルクスに求めることはできない。レーニンも同様に死後50年、100年たって現れたことがらを引き受けることはできないし、その問題の解決をレーニンに求めることはできない。真のマルクス＝レーニン主義者は、現在

の状況にもとづいて、マルクス＝レーニン主義を認識し、継承し、発展させなければならない。「新たな観点でマルクス＝レーニン主義を継承・発展させないかぎり、真のマルクス＝レーニン主義ではない」(『人民日報』1989年5月17日付報道)。

客人 社会主義的商品経済は、新しい思想・観点ですね。

主人 それは、たいへん重要で基本的な新しい思想・観点です。この新しい思想・観点はどこからきたのか。小平同志は、実践の中から、とくにここ数年の経済制度改革の実践の中からきたことを強調しています。マルクス主義は実践の中で発展し、ひとびとの認識は実践の中で向上します。実践は第一、実践は認識の源泉、真理の基準であり、理論的論争の中で実践は最も雄弁です。

客人 先ほどあなたが紹介した、社会主義的商品経済という定式については、理論界に賛成・反対の論争があったそうですが、この文書を数年前には書けず、「書いても、容易には採択されない」と、どうして小平同志が言ったのか、理解が増しました。

主人 小平同志が理論界のこの論争を知っていたかどうか、あるいはどの程度細部まで知っていたかどうか、わたしは知りません。いずれにせよ、小平同志の理解によれば、多くの年月、われわれの理論隊列では、社会主義的計画経済だけを重視し、商品経済を社会主義とは別のものと見ており、この伝統的観念はなかなか頑強であり、ここ数年の経済制度改革の実践と成果がなかったならば、多くのひとびとが社会主義的商品経済という新しい観念を受け入れることは、容易ではありませんでした。小平同志は次のように述べました。「思想の解放、わたしたち古参の同志にはこの任務がある」。これが顧問委員会総会における講話であったのは、対象が古参の同志であったからです。わたしたちのような者は、古参の理論活動家の中に入ります。思想の解放、わたしたち古参の理論活動家にはこの任務がある。

客人 中央委員会の総会が「経済制度改革の決定」を採択し、「社会主義的商品経済」は中央が確認した規範的定式になったのですが、理論界の共通認識をかちとりましたか。

主人 少なくとも共通認識をかちとるために、土台を提供しました。「決定」は社会主義的商品経済を認めましたが、まだ社会主義的市場経済という定式は使用していません。「決定」は、社会主義的計画経済はつまり計画的商品経済である、ということを説明するさいに、次のように指摘しました。それは「完全な市場調整による市場経済ではない」。これに対して、理論界にはさまざまな理解がありました。ある者は、これは市場経済の否定であると考えました。ある者は、「完全な市場調整による」市場経済を否定しているだけで、市場経済一般を否定していない、と考えました。「完全な市場調整による市場経済」は、たとえ資本主義社会でも、すでに過去のものです。現代の市場経済は、たとえ資本主義的市場経済でも、すでにさまざまな程度、さまざまな方式で、政府の介入、計画調整を受けている市場経済であり、もはや完全に政府の介入、計画調整を受けていない市場経済ではありません。理論界は、社会主義的市場経済を行うことに賛成し、社会主義は「完全な市場調整による市場経済」を実行するなど主張しないことを表明しました。

客人 経済制度改革の決定の採択は、社会主義的商品経済を規範的性格の定式として確認したので、社会主義的市場経済という定式を使用すべきでない、ということの意味したのでしょうか。

主人 そうは言えないと思います。少なくとも多くの人がそうではないと考えました。小平同志もそうではないと考えたと思います。その証拠に、彼はその後の談話で依然として正面から市場経済という定式を使うことを避けておりません。これからすぐ小平同志の第三次の関連論述を話すことにしましょう。

第三次論述と生産力の基準

客人 ほかでもない1985年10月の小平同志とアメリカの企業家代表団との、あの時の談話ですね。

主人 あの談話の時は、ちょうど「経済制度改革の決定」の採択一周年でした。アメリカ企業家代表団の団長ガロンワードは、小平同志に質問しました。彼の

質問は、社会主義と市場経済との関係でした。小平同志の答えは次のとおりです。「問題は、どんな方法を用いれば、社会的生産力の発展によりいっそう有利であるか、です」。「これまでわれわれは計画経済を行ってきました。これは当然立派な方法でしたが、ただ長年の経験が示しているように、この方法だけでは、生産力の発展を束縛しがちなので、計画経済と市場経済とを結合するのは当然であり、そうすれば、一步進んで生産力を解放し、生産力の発展を速めることができます」。このくだりの談話は、新華社が10月23日にニュースとして発表し、翌日主要各紙すべてが掲載しました。

小平同志は、この中ではっきり、生産力の基準を用いて、計画経済と市場経済の問題を観察し、評価しなければならないと強調しました。マルクス主義の認識論、真理論の実践基準は、史的唯物論と科学的社会主義の分野で運用され、一步進んで、生産力基準として具体化されました。生産力基準を、社会主義の各種活動の根本的な是非を量る基準として堅持することは、ほかでもない史的唯物論と科学的社会主義の分野で問題を研究することであり、マルクス主義の思想路線を堅持することです。

客人 あなたが『文匯報』に書いた論文は、小平同志の「問題は、どんな方法を用いれば、社会的生産力の発展によりいっそう有利であるか」を引用して、これこそマルクス主義者の問題検討の出発点だと考え、ある外国の辞典の定義を出発点として市場経済の問題を検討する観点を批判しましたね。

主人 問題の検討は、定義から出発できません。このことは、毛沢東が『延安の文芸座談会での講話』の中で提出しました。定義から出発せず、実際から出発する。これは、マルクス主義の思想路線の必然的要求です。わたしは、市場経済の問題を検討したある論文を見ましたが、それは外国のある経済学辞典を出発点にしており、その辞典が市場経済に下した定義は、私有財産制度を基礎とするというような一文を含み、したがって市場経済は、ただ資本主義だけのものだと述べています。わたしは、この意見に照準を合わせて議論しました。わたしの考えでは、「問題の検討は、定義から出発してはならない。たとえマルクス主義の辞典が下した定義であっても、出発点とすることはできないのだから」

ら、まして外国のしかも非マルクス主義の辞典が下した定義は、なおさらそうではないのか。さらに別の外国の辞典は別の定義をしているのだから、なおさらそうではないのか」。わたしの今回の議論は、問題の検討にまさか定義を用いなくてもよいのではないか、という疑問を引き起こしました。これは完全な誤解です。定義から出発できないということは、定義を用いてはいけないことと同じではありません。問題を検討し、思想を表現し、概念を運用すれば、概念は定義をもつことができます。しかし、定義は多様であり、変化します。問題の検討は実際から出発しなければならず、その中には、実際にもとづいて定義を検討し、分析し、選択し、創造しなければならないという意味があります。ここで言う実際は、すでに存在している実際、発展・変化している実際、まさに開拓・創造中の実際を含みます。市場経済は私有財産制度を基礎とする、と言われますが、このような定義は、せいぜいすでに存在している資本主義国の市場経済の実際だけを反映し、資本主義の一部の国でさえも若干の国有財産をもっているなどという実際はとうてい反映できておらず、まして社会主義制度の下での市場経済の発展という開拓と創造の最中の実際の反映など問題になりません。その実、ある外国の辞典、たとえばイギリスのピアス編『現代経済学辞典』（上海訳文出版社）には、別の記述があります。その辞典の市場経済の定義は次の通りです。「ある経済制度は、その制度の下で、資源配分と生産に関連する政策決定が価格を基礎とするものであり、そして価格は、ただ生産者、消費者、労働者、生産要素所有者の間の自発的交換だけが生みだしたものである」。この定義は、私有財産制度を内部に含んでいません。市場経済と所有制とのつながりの問題は、この辞典の説明ではこうなっています。「市場経済は通常、生産手段の私的所有制、すなわち資本主義的経済を含む。しかし社会的所有制の条件の下でも、市場経済は一定程度機能を発揮する」。わたしは、この辞典の定義が、発展・変化し、開拓・創造中の実際に完全に合致しているとは思いますが、しかし明らかに、市場経済の基本原則の一つは私有財産制度であるなどという定義の認識よりも、いくらか優れています。

客人 あなたは、市場経済のどんな定義がよいと思いますか。

主人 これは、経済学の専門家が真剣に研究、討論し、発表しなければなりません。わたしたちが一般的に問題を検討する必要から言うと、わたしは、市場経済の定義を「市場調整を基礎とする経済」、あるいは「市場が資源配分のさいに基礎的作用を果たす経済」とも言えるのではないかと考えています。この定義を用いて、しかし「市場経済は私有財産制度を基本原則とする」という定義を用いなくて、はじめて社会主義制度の下で市場経済を行うことができるかどうかという問題を検討することができます。当然、問題の検討の出発点は、やはり定義——わたしが賛成する定義も含む——ではなくて、社会主義の改革の実際であり、社会主義制度の下で市場調整作用を発揮させる成果と経験、問題と進路の実際なのです。

第 13 回党大会報告と第 4 次論述

客人 小平同志の第 4 次の関連論述の背景をもう一度紹介してください。

主人 1987 年 10 月の第 13 回党大会報告は、この問題の理論、政策・思想に関して、「経済制度改革の決定」よりも、さらに一步前進しました。党大会報告は、「経済制度改革の決定」の中で述べられている「総じて、わが国が実行しているのは、計画経済、つまり計画的商品経済であり、完全な市場調整による市場経済ではない」、を繰り返すことはしていません。報告が強調した点は次の通りです。社会主義経済（「決定」の中のこの箇所で行われているのは“社会主義的計画経済”であることに注意して下さい）は、公有制を基礎とする商品経済である。社会主義の計画的商品経済制度は、計画と市場が内在的に統一された制度でなければならない。社会主義的商品経済と資本主義的商品経済の本質的区別は、所有制という基礎の違いにある。計画調整と市場調整という二つの形式を上手に運用して、社会全体における国民経済の調和ある発展を維持する。社会主義的商品経済の発展は、市場の発展および改善と離れられないが、市場調整を利用することは、決して資本主義を行うことと同じではない。計画活動は、商品交換と価値法則の基礎の上に建設しなければならない。指令性計画を主とする直接

管理の方式は、社会主義経済の発展の要求に応えることができない。計画調整と指令性計画とを同じとしてはならない。指令性計画の範囲を徐々に縮小すべきである。企業に対する国の管理は、間接管理を主とする方向に徐々に転換すべきである。……「報告」はまた、社会主義的市場システムの急速な建設と育成とが必要だとし、消費財や生産手段などの市場だけでなく、資金・労務・技術・情報・不動産などの生産要素市場を含むべきだとしました。社会主義の市場システムは、競争的で開放的でなければなりません。

客人 この思想は明確ですね。

主人 第13回大会以後、理論界の一部の同志は、社会主義的市場経済という定式の採用を建議しました。彼らは、比較的発展した、社会化が相当高度に達した商品経済は、市場経済であると考え、あるいは、商品もあれば市場もあるので、商品経済と市場経済は同一の事物の二つの側面であり、両者は同義語と見ることができる、と考えました。彼らは、市場経済という定式の採用は、商品経済の運行メカニズムの特徴を突出させ、市場が資源配分の主要手段になることを明示することができる、と考えました。わたしは基本的にこの意見に賛成です。1988年にわたしは『思想を解放する新起点』（湖南人民出版社）という本を書き、その中で次のように述べました。「商品経済、市場経済は、資本主義制度の下で十分に発展でき、現在もなお深く広く発展している。社会主義国は過去に商品経済を排除・制限した。高度に集中的な行政管理の生産物経済は、ある特定の状況の下で、またある特定の任務の上で効果がある、と一般的に言われるが、それはすでに活力に欠けていることを証明した。現在わたしたちは、社会主義の公有制を主体として堅持する必要がある、これを基礎に市場経済、つまり社会主義的商品経済を行う必要がある、これは新しい課題であり、困難点でも特徴点でもある。社会主義的公有制を堅持しているのだから、根本的に資本主義的市場経済とは異なる。市場経済を行わなければならないので、資本主義的市場経済から、生産の社会化、商品化、現代化の共通法則を反映する文明の成果を吸収しなければならない。これらは資本主義の専売品でなく、資本主義も利用できるし、社会主義も利用できる」。この観点に対しては、理論界には

別の意見がありました。

客人 そのあと、どうなりました。

主人 小平同志のこの問題についての第4次論述は、1989年6月9日の講話の中にあります。当時は、あの[天安門の]政治動乱が収まったばかりでした。小平同志は、この講話の中で鋭く提起しました。「この動乱が発生したので、われわれが制定した路線・方針・政策の正しさに問題が発生したのか」。これは、多くの者の脳裏に浮かんだ問題です。小平同志は明確に答えました。「誤りはありません」、「すべて不変です」、第13回大会が確定した路線は、改めてはいけません。

客人 この「誤りはありません」、「すべて不変です」、「改めてはいけません」には、当然、わが党が改革の十年の実践で形成してきた社会主義的商品経済に関する多くの新しい理論、政策・思想が含まれています。

主人 小平同志の6月9日の講話は、当時党内の一定範囲で印刷・発行され、その後公開発表されました。

客人 この講話の中で、計画経済と市場経済の結合について述べていましたか。

主人 公表した文章の中で、小平同志は次のように述べています。「われわれは、計画経済と市場経済の結合を引きつづき堅持しなければならない。これを改めてはならない。実際の活動では、調整期には計画性を多少強めるか、多くし、別の時期には市場調整を多少多くしてよい。少々弾力的に行うことだ」。

客人 当時の背景は、整理整頓でしたね。

主人 整理整頓のときは、計画性を多少強めるか、多くしてよい。小平同志は、それを、一定の時期の実際の活動中のある具体的措置とみなしており、方針・原則・指導思想・理論観点としては、わたしたちは、社会主義的商品経済と、市場と計画という問題で、すでに形成したひとまとまりのものを、改めてはなりません。

客人 後ろ向きに改めてはなりませんね。

第5, 6次の論述の背景と内容

主人 この問題に対する小平同志の第5次の論述は、薄一波同志が次のように紹介しました。「1990年12月、彼がわたしたちに求めたものは、資本主義と社会主義の区別は計画、市場というものの内容でないことを理論的に理解しなければならない、でした。社会主義にも市場調整があり、資本主義にも計画制御がある……市場経済を少し行ったからといって、資本主義の道だと思っはならない。そんなことはない。計画経済と市場調整はどちらも必要だ。市場をやらないと、自ら落伍に甘んじ、世界のニュースすら分からなくなる」(『半月談』1992年第15号)。

客人 1991年3月2日、上海の『解放日報』は皇甫平署名の論文「改革・開放は新しい思考を必要とする」を發表しました。その中にある次の一文がひとびとの注意を引きました。「思想の解放は決して一度の苦勞で永久の樂をすることではない。計画と市場の關係を言えば、ある同志は常に計画經濟を社会主義經濟と同じだと見なし、市場經濟を資本主義經濟と同じだと見なす習慣があり、市場調整の背後にはかならず資本主義の幽霊が隠れていると考えた。改革が一步進んで深化するにつれて、ますます多くの同志が次のことを理解し始めた。計画と市場は、資源配分の二つの手段および形態にすぎず、社会主義と資本主義を区別する標識ではない。資本主義にも計画があり、社会主義にも市場がある」。この一文は、小平同志の1990年12月のあの談話の精神にもとづくものでしょうか。それとも小平同志が別に行った談話の精神によるものでしょうか。

主人 それは知りません。調べたことがありません。

客人 小平同志はこの時どうして「市場經濟を少し行ったからといって、資本主義の道だと思っはならない」ということを提起したのでしょうか。

主人 吳敬璉同志のこの談話の紹介によれば、理論界にはブルジョア的自由化を批判し、あるいはブルジョア的自由化の理論的土台を批判する論文が少な

らずあり、計画と市場の問題を基本的制度と直接に結びつけ、これは姓が「社[会主義]」なのか、姓が「資[本主義]」なのかの問題だと考えました。これらの論文の運用と、1984年以前の「社会主義的商品経済」の批判とは、ほぼ同じ論拠と用語を用いており、社会主義経済は計画経済でしかあり得ない、市場経済は資本主義経済でしかあり得ないと考えて、改革の目標を「市場志向」に置き、「市場経済」をわが社会主義経済制度の目標・モデルとするならば、「資本主義的生産様式の経済範疇と社会主義的生産様式の経済範疇とを混同し」、「ひいては社会主義経済の性格を改変するだろう」。これは実際には、1984年の第12期3中全会の決定がすでに突破した伝統的観点を用いて、全党がすでに到達した共通認識を否定するものであり、認識上の後退であり、後戻りです。

客人 90年代初めの小平同志の市場経済に関する談話の背景は、おそらくこれらの状況と関係があるのでしょうか。

主人 社会主義を否定し、資本主義を主張し、私有化を吹聴すること、それはブルジョア的自由化であり、批判する必要があります。もしも社会主義的市場経済の主張をブルジョア的自由化だと見なしたり、あるいはその理論的土台だと見なして批判するならば、それは方向、政策の把握が正しくないと言うべきです。社会主義的市場経済に賛成かどうかは、当然理論界でまったく自由に討論できる問題です。

客人 小平同志の今年初めの南巡談話の関係論述は、実は彼が以前に度々述べた思想の繰り返しです。

主人 この第6次の論述も繰り返しですが、新しい展開と発展があります。彼はまず第一に、思想をさらに解放せよという一点から、問題を提出しました。彼が言うには、「改革・開放は足を前に踏みだしておらず、勇敢に突き進んでおらず、資本主義のものが多く、資本主義の道を歩むことが恐ろしいと長々述べたてる。ポイントは姓が“資”なのか、“社”なのかの問題である。判断の基準、主に見なければならないのは、社会主義社会の生産力の発展に有利かどうか、社会主義国の総合国力の増強に有利かどうか、人民の生活水準の向上に有利かどうか、である」。

客人 これと1985年のアメリカ企業家代表団との談話、市場経済と社会主義の関係の討論、問題はどんな方法を用いれば社会的生産力の発展に有利かの強調は、完全に同じ思考です。

主人 小平同志のこの三つの「有利」の判断基準について、ある同志は次のように理解しました。三つの「有利」に適合する基準は姓が“社”であり、適合しないものは姓が“資”である。これは正しくないと思う。たとえば、高度に集中的な、完全に行政指令的な計画経済は、三つの「有利」に適合しません。しかし、あなたはそれを姓は“資”と言えますか。国外投資の導入は、三つの「有利」に適合し、社会主義的政策ですが、「三資企業」はすべて姓が“社”とは言えません。ついでに言えば、三つの外商投資企業——中外合資、中外合作、外商独資——は、略称「三資」ですが、適切ではありません。もし略称がどうしても必要なら、「三外企業」の方がましです。小平同志は、中外合資・合作は「半分は社会主義だ」と述べたことがあります。すべて姓が“社”だとは言いません。わたしの考えでは、小平同志が提出した判断基準の正しい理解は、次のようでなければなりません。すべて三つの「有利」に適合する、あるいは社会主義のものである、あるいは社会主義が必要とし許可するものである、と。この三者に不利なものは、すべて社会主義が決して堅持すべきもの、あるいは許可すべきものではありません。

客人 南巡談話は社会主義の本質に関する概括であり、新しい概括です。

主人 この概括をつくりだした目的の一つは、説明しておく必要があります。「計画が多いか、市場が多いかは、社会主義と資本主義の本質的区別ではない。計画経済は社会主義に等しくなく、資本主義にも計画がある。市場経済は資本主義に等しくなく、資本主義にも計画がある。計画と市場はいずれも経済手段である」。この二つの「等しくなく」は、わたしたちの“ご先祖様”が述べたことのない新しい言葉であり、あるいは事物の新しい発展と実践の新しい経験とにもとづいて“ご先祖様”が述べたいくつかの古い言葉を改変した、と言えます。まさに皇甫平が論文で述べている「この科学的認識の獲得は、まさにわれわれの社会主義的商品経済の問題における、また一つ重要な思想の解放であ

る」。

客人 これは、現在の状況にもとづいており、新しい思想・観点を以ての継承であり、マルクス主義の発展です。

社会主義的市場経済の問題における共通認識の形成

主人 小平同志の関係論述を総見すると、市場経済と社会主義との関係の問題で、彼の思考過程は一貫しております。この13年間に彼は少なくとも6回この問題に論及したが、このことは、彼がこの問題について深慮熟考を重ねたことを説明しています。彼は、この基本的理論問題で形成した新しい思想・観点を、ずっと放棄しませんでした。全党は、この問題で共通認識を形成し、この共通認識を強固にし、発展させ、わが経済制度の改革を大いに有利に推進し、すでに確定した目標に向かって前進・発展しています。

客人 見たところ、社会主義的市場経済は、わが経済制度改革の目標・モデルとして確定できましたね。

主人 これは必至の勢いであり、もちろん理にかなっていると思います。ここではまず第一に実践の問題です。経済制度改革はすでに十数年を経過し、この十数年の実践の経験を総括すると、事實は明白です。わたしたちの社会主義的市場経済をめざす改革は、総じてよい成果をあげ、わたしたちは市場経済という定式を用いませんでしたが、商品経済、市場調整、市場の作用の十分な発揮、という定式を用いました。深圳などの経済特区の発展はとても速く、そこでは最初から「市場調整を主とする」方針の実行を明確に決めていました。経済特区の姓は「社」であり、「資」でないことを認めることは、わたしの考えでは、経済特区の市場経済または市場調整を主とする経済の姓が「社」であり、「資」でないことを含み、認めることでもあると理解できます。広東の珠江デルタなどいくつかの沿海地域の経済発展はとても速く、活力にあふれ、多くの集団企業・郷鎮企業、多くの個人企業・私営企業の発展はとても速く、活力にあふれ、その原因は多面的ですが、市場経済の中での運動・作用であることが重要な原

因である、と認めなければなりません。国有企業の経営が活気に満ちている原因もまた多くあるが、比較的よく市場の要求を充たし、市場に進出していることが、重要な原因である、と認めなければなりません。過去の「市場経済は資本主義と同じ」という伝統的観念の影響で、ひとびとは、これらの経済的成果に言及するとき、市場経済との関係を避けてきましたが、現在「市場経済は資本主義に等しくない」ことを明確にしたので、ひとびとは、回避したり、忌避したりしなくてもよくなりました。第二に、改革を深化させる必要があります。目下、改革が遭遇している困難、存在する問題もまた非常に多いのですが、その多くは、市場の作用をもっとよく発揮させることに関連しています。国有企業は経営メカニズムを転換し、自主経営、損益自己責任の経営実体になり、市場競争のなかで生存を求め、発展を求めなければなりません。価格の不合理的は調整し、価格形成メカニズムは、基本的には、市場の需給の変化によって決める軌道に移さなければなりません。市場システムは育成と発展を待っています。……社会主義的市場経済の目標・モデルを確認し、経済制度改革を深化させることのできる明確な方向がいます。

客人 では、あなたは、「社会主義的市場経済」の規定、「社会主義的市場経済」と「資本主義的市場経済」の区別について、簡単に説明できますか。

主人 「市場経済」は共通の性格です。「資本主義的市場経済」,「社会主義的市場経済」は個別の性格です。共通の性格の「市場経済」の規定をしましょう。わたしはすでに簡単な定義を与えました。小平同志は、1979年にこう述べました。社会主義の市場経済は、方法的にも、基本的にも、資本主義社会 [のそれ] と似ている。これは共通の性格を述べたのです。個別の性格,「社会主義的市場経済」と「資本主義的市場経済」との違いとなると、小平同志が強調した点は、所有制という基礎が違う、ということです。

客人 つまり方法・手段としては、市場経済は市場経済であり、資本主義の条件の下での方法・手段と、社会主義の条件の下での方法・手段とにどんな違いがあるのかを、強調する必要はありません。

主人 基本的には似たものなんです。方法的にはいくらか差異もあり得ます。

この問題は、実践のなかで経験を総括して、解決しなければなりません。試験の前に、結局どんな区別があるかを、論争ではっきりさせる必要もなければ、できないことでもあります。

客人 区別は、主として、所有制という基礎にあります。社会主義的公有制を主体とする基礎の上に建設すること、これが市場経済のわたしたちの社会主義的規定です。

主人 ある同志は、市場経済を行えば、資本主義に向かいかねないと心配していますが、それというのも、彼の見方が次のようなものだからです。資本主義国の多くの論者は、市場経済は私有財産制度を基礎にしていると断言しているだけでなく、もともと社会主義国の多くの論者も、市場経済に向かうことと私有化の実行とを結びつけている。つまり、市場経済に向かうことは、社会主義を放棄することだ、と。そこで、彼らは、その道に反対して、社会主義を堅持し、市場経済を拒絶しなければならない、と断言するのです。わが党の主張は別です。わが党は、社会主義を堅持し、私有化を行わず、公有制を主体とする基礎の上で市場経済を行うことを主張しています。

客人 これは、先人が歩んだことのない道です。

主人 マルクス主義者は、これまでずっと先人が歩んだことのない道を切り拓かねばなりませんでした。社会主義革命や社会主義建設は、先人が歩んだことのない道ではないでしょうか。現在、社会主義の改革を行っていますが、私有制を基礎として市場経済を行う先人の道を歩んでいない以上、[それと]以前の社会主義建設者が公有制の基礎の上で計画経済を行った道とでは、相当大きな違いがあります。

客人 経済制度、運行メカニズムにある種の根本的性格の違いがありますね。

主人 所有制の構造と公有制の実現形式にも違いがあります。過去のわれわれの所有制の構造ですが、社会主義的公有制を唯一の基礎だと強調し、ある時期には、公有制が「純粹」であればあるほど、「高級」であればあるほど、素晴らしい、と強調すらしました。現在わたしたちは、わが国の社会主義が初級段階であるという実際から出発し、また現代世界の他の国の経験をも参考にしてい

ます。公有制経済が主体的地位を占め、主導的役割を果たすこと、個人経済・私営経済・外資経済を補充にすること、多くのウクライナの長期・共同の発展をはかること、これを決めています。それは所有制の構造の改革です。さらに重要な点として、公有制の実現形式も改革が必要です。集団的所有制は、改革しなければなりません。つまり形を変えた国家的所有制に近い形式から、集団的所有制の権利・責任・利益を体现する形式に改変しなければなりません。国家(全人民)的所有制も、さらに改革しなければなりません。つまり基本的には国の行政機関の付属物、指令計画の執行者である形式から、基本的には自主経営、損益自己責任、市場で平等に競争する経済的法人に、徐々に改変しなければなりません。改革を経ていない以前の公有制について言えば、公有制と市場経済は併存できないという説にも、一理あります。公有制の実現形式が改革されたのに、公有制と市場経済は併存できないという説には、道理はありませんし、すべて偏見に属します。

客人 公有制を改革し、私有化を拒絶するのですね。

主人 そうです。私有化も範囲を決めなければなりません。わたしたちは、主体的地位を占める生産手段の公有制を私有制に変えることを拒絶します。これは、私有化反対と言います。生活手段〔生活資料〕について、マルクス主義者はずっとその公有制を主張しませんでした。生産手段について、わたしたちは現在もその私的占有を完全に排除しておりません。個人労働者が彼らの労働に必要な生産手段を占有することは、当然許されます。一定範囲、補充として私営資本と外国資本も、許されます。農村は家族の生産量連動請負責任制を実行していますが、内外のある論者は、これを私有化だと呼びました。それは、正しくありません。農村の土地は公有です。当然、農家は農具、役畜、農業用機器など他に若干の生産手段をもつことができます。企業の株式制の試みも、内外のある論者は私有化だと呼びました。正しくありませんね。株式制の性格は、株式所有者の性格によって決まり、株式所有者は国家であり、集団であり、私人ですから、株式制が私有制だと考えることはできません。

客人 わたしたちの市場経済の社会主義的規定には、さらに別の側面があるの

でしょうか。

主人 あります。現代の資本主義的市場経済は、さまざまな程度の国家介入があり、計画的指導の市場経済です。その国家は、資本主義国家です。わたしたちの市場経済は、わが国の法律、政策、必要な計画調整、行政管理の下にある市場経済です。しかもわが国は、社会主義国家であり、最大多数の最高利益を代表しています。わが国の法律、政策、計画、管理は、このような利益を体現しなければなりません。資本主義の国家が、彼らの国の市場経済に介入する多くの具体的方法、経験は、わたしたちにとって、理解し、参考にし、わたしたちの状況にもとづいて学習し、運用する価値があります。この側面には共通の性格があります。しかし、国家の性格の違い、これは個別の性格です。

客人 市場経済を行うことの心配は、一に私有化、二に無政府です。

主人 わたしたちには政府があり、しかも社会主義の政府です。小平同志は、1979年に最初に、われわれも市場経済を行うことができると述べたとき、結局のところ社会主義国であると言い、1992年の南巡談話でも、「もっと重要なことは、政権がわれわれの手中にあるということだ」と言いました。わたしたちの政権は、市場経済に対して、マクロ的計画調整をしなければなりません。ただ計画調整の概念および方法は、いずれも過去と多くの違いがなければなりません。総括的に言えば、わたしたちが建設し、発展させなければならない市場経済は、社会主義的公有制を主体とする基礎の上であり、そして社会主義国家の政策、計画のマクロ的調整・制御の下にある市場経済、すなわち社会主義の条件の下での市場経済です。したがって社会主義的市場経済と呼ぶのです。

客人 ある意見ですが、市場経済、計画経済自身、基本的制度の属性でないと考えるならば、どうしてまた「社会主義的」市場経済と言わなくてはならないのでしょうか。

主人 市場経済は、資本主義と同じではありません。しかし、資本主義の条件の下で市場経済を実行すれば、資本主義的市場経済です。社会主義の条件の下で市場経済を実行すれば、社会主義的市場経済です。ちょうど現代化のように、現代化自身は基本的制度の属性ではありません。社会主義の条件の下での現代

化の実現は、社会主義的現代化です。

客人 社会主義的市場経済は、どのように建設し、発展させたらよいのでしょうか。

主人 それは大きなテーマです。うまく話せません。総じて、改革の任務はまだ大きな困難に満ちており、わたしたちがすでに創りだしたもののすべてを、言い換えれば、もともと「市場調整」と呼んだものを、現在「市場経済」と呼んでも、決して事は完結したのではありません。社会主義的市場経済という新しい制度を建設するためには、観念を変え、構想を描き、一連の重要な措置を手順よく採用しなければなりません。わが国は非常に大きく、経済・文化の発展は非常に不均衡であり、改革の展開も非常に不均衡です。一面で、チャンスをつかみ、改革を速めなければならず、90年代は正念場です。他面で、長期の努力をしなければなりません。小平同志は次のように述べました。「おそらく、さらに30年の時間があれば、われわれは、各方面で一揃いのもっと成熟した、もっと定型的な制度を形成することができるでしょう」。いずれにせよ、経済制度改革の目標・モデルにおける共通認識ですが、この点は非常に重要です。共通認識があるならば、みな 노력は強大な合力を形成できます。

実事求是，百家争鳴

客人 今年の6月以来、新聞紙上に社会主義的市場経済を論じた報道や文章が比較的多くなりましたね。理論界には現在、共通認識があるのでしょうか。

主人 共通認識は、討論の中で、実践の中で、形成し発展させるべきものです。現在、市場経済の問題について、実事求是で自由に討論することができますが、これはたいへんよいことです。賛成するもの、賛成しないもの、不完全に賛成するもの、あれこれの理解、多くの異なる意見があり得ますが、理論界では自由な討論が許されるべきです。市場経済をめざす改革の構想、方法、手順、発生する可能性のある問題、あらかじめ準備しておくべき対策については、さらに自由で適切な討論を展開しなければなりません。

客人 最後の問題を一つ。社会主義的市場経済の定式に賛成の同志は、小平同志の論述を引用し、自分を支えていますね。しかし、マルクス主義の思想路線は、実践が真理の基準であり、権威ある引用は真理の基準ではありません、この点、ちょっとどうかと……。

主人 よろしい、わたしがその問題に答えましょう。第一に、小平同志の論述を引用する多くの同志は、彼の理論・思想を研究し、紹介するためです。引用者がある論述に賛成し、紹介するのは、その論述に道理があり、実際に合致していると考えたからであって、ある人の口からそれがでてきたからだけではありません。「実践は真理を検証する唯一の基準である」という大論争を経て、わたしたちは、すでに毛沢東の「二つのすべて」の思想的な檻を打ち破りました。それは、毛沢東が晩年に誤りを犯したからだけではありません。“ご先祖様”について、わたしたちは現在、“ご先祖様”の話した言葉の「一句一句が真理だ」と考えてよいものでしょうか。小平同志自身決してそう考えていませんし、また決して他人が自分の言葉の「一句一句が真理だ」と考えるように要求していません。彼の中国の特色をもつ社会主義の建設の理論は、全体的に言って、すでに実践によって正しいことが証明されており、また実践の中で引きつづき検証を受け、豊富にし、発展させなければなりません。彼のあれこれの言葉は、真理ではなく、すべて実践により検証しなければならず、討論を許さなければなりません。第二に、ある同志がある問題について論述するとき、小平同志の言葉を引用して自分を支えるのは、その言葉が正しいと考える以外に、確かにさらにもう一つの考慮があります。つまり、そのことによって、「大きな帽子」による脅しを防止し、自由な討論の保証を得ようとしています。これも実際の状況です。小平同志の言葉は、当然、真理の基準にはなり得ませんが、少なくとも無理に非難するにはあたらないでしょう。

客人 「姜太公ここにあり」⁽²⁾！、「泰山の石は無敵」⁽³⁾！

主人 マルクス主義の实事求是の思想路線と百家争鳴の学術方針とは、わたしたちの「姜太公」であり、「泰山の石」です。

訳者註

羹育之 1929年に生まれる。中共中央党学校副校長、同校「中国の特色をもつ社会主義建設理論研究センター」主任。48年中国共産党入党。52年清華大学化学系卒業。78年全国政治協商委員。党中央文献研究室に勤務のとき、「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」(81年6月採択)の起草に参加。82年同研究室副主任。88年党中央宣伝部副主任。著書『歴史の転換において』。

- (1) 大帽子……転じて「権威、政治的レッテル」を意味する。
- (2) 専業戸……特定分野の技能に秀でた農家。
- (3) 姜太公……姜太公は神祖、すなわち神々の元締め。転じて、いかなるものにも打ち勝つ。
- (4) 泰山石……泰山は中国の名山の首位。当初は泰山の石をもってきて魔除けとしたが、後に「泰山石」と紙や板に書き、石に刻んで魔除けとした。